

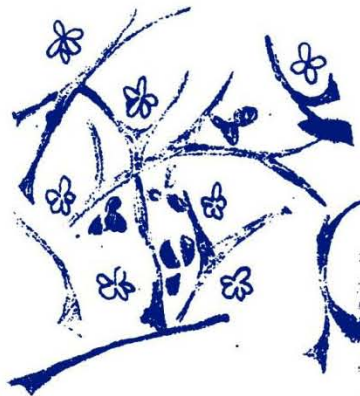
十期生

私のハンドボール歴

中江 義雄

私のハンド・ボール歴をふりがえ、てみると、本当によくまあ、あきずき七年間もの長い年月ハンドボールに没頭したものだ。自分自身恐ろしく思われるのである。即ちその七年間という長い年月をハンドボールにお世話になつた事によつて他の人々と比較して何か今後社会生活を行つていく上に於て、対等に生活をもしくはすると送ることが出来ないのではなからうか、という事である。しかし私には反対にハンドボールにたずさわつた事により最も社会生活を送る上に大成功な、強い責任感・豊かな協調性の確立・強かな体力を身につけたと信じている。今後一社会人となる運命にある我身をこのかけがえのない体験をもつて是非に送らせたく思つています。

さて、私の高津での三年間へ實際には二年間かもしれないが、のハンドボール生活は今思うと少し物足りないものでありまして、即ち、もう少し練習に打ち込んでいた



ら、今現在まで高津ハンドボール部が達成することの出来なかつたインテハイ・団体の出場を成し遂げていたように思う。十数人の部員は試合前の数日間の練習のみで事足りるようには考へていた。何か趣味的な、いわゆる「お遊び練習」であつた。全く口惜しいことをしたものである。後輩の皆は、このような先敗を起すことなく、一度先輩の悲願のインテハイの出場権を獲得してほしい。

このような事情からか、入学に入つてから、今この原稿を書き続けている。現在のリグ戦の四日目を経て、帰つて来て書いています。次の週は難敵関学である。我々高津の先輩が悲願として、いるインテハイ出場と同様に、私の属する同志社の先輩も、関学を窮地まで追いつめながら秋のリーグには一度も勝つていない。しかし今年こそ、自分の最後のハンドボール生活を飾るために優勝したく思つてゐる。

今まで天方の大試合には、自慢ではないが、出場した。しかし、この学生王座には、出場をしていない。その原因は、伝統という壁を破ることが出来ない敵である。

かし、必ず今年こそ下級生を引っぱって、その伝統の力を打ち破るこゝろが出来ると思

士期生

現役の時をふりかえる

石崎 寿夫

高校卒業から、はや三年目となりました。正確に言えば三年生の三分の二はハンドボールとは縁を切っておりましたから、その方で教えること三年はたつぷりすぎている。今も学生生活を続けてい

化されて記憶にどこめられると言いますが、一年生当時、嫌でたまらなかつた練習の苦しさ、さぼつた時のうれしさ、二年生に主として勉強との両立問題で、悩み、あるいは退却したりするのをまよとめていく、わばマネーゲームの苦勞も、今となっては、遠足の思いと変るところありまじい。生来、個人的、非社交的、悪く言えれば、利己的の僕がキヤプテンの任務をつとめ、あせたのも、谷口君を初めとする同輩年の連中をほじめ、先輩諸兄、下級生の援助があれはこそでした。